

中部の古墳

天理市中部の古墳 杣之内(そまのうち)古墳群 石上・豊田(いそのかみ・とよだ)古墳群 別所古墳群

大和高原から盆地内に流れ出る布留川の形成した扇状地に広がる布留遺跡(ふるいせき)は、古墳時代中期から後期を中心に首長(しゅちょう)の館や大型倉庫、工房、大規模な水路などがつくられた巨大な集落遺跡です。そして、布留遺跡の南側の段丘上には杣之内古墳群、北側の丘陵上には大群集墳(だいぐんしゅうふん)として知られる石上・豊田古墳群や別所古墳群が立地しています。

杣之内古墳群では日本列島最大の前方後方墳(ぜんぼうこうほうふん)である西山古墳のほか、大型前方後円墳である西乗鞍古墳、巨石積み(きよせきづみ)横穴式石室を持つ塚山古墳など80基以上の古墳が知られています。また、石上・豊田古墳群と別所古墳群には、大型前方後円墳である石上大塚古墳・ウワナリ塚古墳・別所大塚古墳のほか、大小およそ200基を数える多数の古墳が確認され、多くの発掘調査成果があげられています。

布留遺跡は古代豪族(こだいごうぞく)の物部氏(もののべし)の拠点とされ、周辺の古墳群もその墓域(ぼいき)としての性格が指摘されています。

西山古墳(にしやまこふん) 杣之内町・勾田町 古墳時代前期

長さ181mの前方後方墳です。ただし、墳丘(ふんきゅう)の下部は前方後方形であるものの、その上に前方後円形をのせる特異な形をしています。墳丘の周囲には濠(ほり)がめぐり、一部はため池として利用されています。濠を含む全体の規模は長さ263m、幅196mと復元されています。レーダー探査の結果、後方部(こうほうぶ)の頂上には南北方向の竪穴式石室があると推定されます。かつて、銅鏡の破片、鉄剣、腕輪形石製品(うでわがたせきせいひん)の破片などが出土したという記録があります。また墳丘には埴輪列・葺石(ふきいし)をともなつてきています。濠の外側には濠がつまいます。後円部(こうえんぶ)の南側に長さ約10mの横穴式石室が口をあけています。その中には九州の阿蘇の石でつくった割り抜き式の家形石棺(いえがたせっかん)と、二上山の石でつくった組み合わせ式の石棺の部材が残っています。



空から見た西山古墳 小墓古墳・西乗鞍古墳・東乗鞍古墳

北部の古墳

天理 山の辺の道周辺の古墳(赤で示した古墳・遺跡は出土品を展示)



西乗鞍古墳(にしりのくらこふん) 杣之内町 古墳時代中期

長さ約118mの前方後円墳で、杣之内古墳群南部では最大の古墳です。古墳のまわりには南北約130mにわたって周辺より一段高い平坦な土地が広がっていますが、この平坦地は濠とその外側の堤が埋まってできたものであることが発掘調査の結果明らかになっています。濠からは円筒埴輪や形象(けいしやう)埴輪が出土しています。

東乗鞍古墳(ひがしのくらこふん) 杣之内町・乙木町 古墳時代後期

前方部(ぜんぼうぶ)が大きく開く大型の前方後円墳です。2018年から天理市と天理大学が共同で調査を進めています。墳丘は現状よりひとまわり大きく、長さは約83mあることがわかってきています。まわりには濠がめぐっています。後円部(こうえんぶ)の南側に長さ約10mの横穴式石室が口をあけています。その中には九州の阿蘇の石でつくった割り抜き式の家形石棺(いえがたせっかん)と、二上山の石でつくった組み合わせ式の石棺の部材が残っています。副葬品の全容は明らかではありませんが、鞍や辻金具(つじかなぐ)などの馬具類と小札甲(こざねこう:よろい)の一部、鉄鏡(てつきやう)が出土しています。



東乗鞍古墳の横穴式石室と石棺

天理市低地部の古墳

天理市内の古墳・遺跡は、その多くが山の辺の道沿いに集中していますが、奈良盆地中央寄りの低地部にも点在することが知られています。近年の開発の進展により、未知の古墳や遺跡が発見されることも増えています。



大刀形埴輪 家形埴輪

低地部の古墳



星塚1号墳 星塚2号墳 荒蒔古墳



人物埴輪(馬曳き)



馬形埴輪



荒蒔古墳 埋まっていた古墳の輪郭

荒蒔古墳(あらまきこふん) 荒蒔町 古墳時代後期

長さ約30mと推定されている前方後円墳です。現在は地上に姿をとどめていませんが、地下に古墳の濠(ほり)が埋まっていることが発掘調査によりわかりました。発掘調査では前方部(ぜんぼうぶ)と後円部(こうえんぶ)の一部が濠の輪郭(りんかく)となって残っていました。濠の中からは多量の埴輪が出土しており、さまざまな姿の人物や動物、王を飾り立てる道具や家など、多彩な埴輪が見つかっています。



黒塚古墳(くろづかこふん) 柳本町 古墳時代前期

長さ約130mの前方後円墳です。後円部中央につくられた長さ約8.3mの長大な竪穴式石室の内部には、長さ約6.1mの割竹形(わりたけがた)の木棺(もっかん)が置かれていました。鎌倉時代の地震による崩壊のため石室の大半が盗掘を免れ、多くの副葬品が残されていました。33面の三角縁神獣鏡(さんかくぶちしんじゅうきやう)、1面の画文帯神獣鏡(がもんたいしんじゅうきやう)とともに、多数の鉄製武器・武具が出土しました。

三角縁神獣鏡はいずれも木棺の北半部を取り囲むように配列されており、全て鏡面(きやうめん)が木棺側に向けて置かれていました。画文帯神獣鏡は、中国の後漢代につくられたもので、木棺内の被葬者(ひそうしや)の頭部に近い位置に、鉄刀、剣、ヤリ各1点とともに置かれていました。銅鏡には織物の痕跡が残っており、個別に布に包まれていたか袋に入れられていたものと見られます。



黒塚古墳 竪穴式石室の銅鏡出土状況

下池山古墳(しもいけやまこふん) 成願寺町 古墳時代前期

墳丘(ふんきゅう)の長さは約125mであり、前方後方墳としては全国で5番目の規模を誇ります。大和古墳群では、ほかにも全国有数の大型前方後方墳がまともて築かれています。埋葬施設(まいそうしせつ)としては、後方部(こうほうぶ)中央にて竪穴式石室が見つかっており、その内部には残存長(ざんそんちやう)約5mを測るコウヤマキ製の割竹形木棺が良好な状態で残っていました。副葬品として、装身具(そうしんぐ)や武器、農工漁具が出土しており、特に装身具の副葬は奈良県内で最初期の事例とされます。



下池山古墳の竪穴式石室と木棺



下池山古墳出土 石剣・勾玉・管玉・ガラス玉(奈良県指定文化財)

南部の古墳

上の山古墳(うのやまこふん) 渋谷町 古墳時代前期

長さ144mの前方後円墳です。鱧付円筒埴輪や朝顔形埴輪、盾形の板材などが出土しました。鱧付円筒埴輪は高さ102.5cmで、5条の突帯(とつたい)を有しています。埴輪の特徴が隣にある渋谷向山古墳の資料と似ていることから、墳丘の外側の堤(つつみ)が渋谷向山古墳と共有されていたと想定されることから、両古墳はほぼ同時期につくられたと考えられます。盾形の板材は、墳丘のくびれ部付近より出土しており、くびれ部の墳丘裾部分に盾のように立てられていた可能性が高いと考えられています。



上の山古墳出土 盾形の板材

立花遺跡(たちばないせき) 柳本町 古墳時代前期

渋谷向山古墳の北西にある集落遺跡です。この遺跡では地中に埋まった古墳の濠が見つかっており、円筒埴輪や盾形埴輪、石製品が出土しています。見つかった盾形埴輪は、同種のものとしては最も初期の例として知られています。



立花遺跡出土 盾形埴輪

行燈山古墳(あんどんやまこふん) 柳本町 古墳時代前期

長さ約242mの前方後円墳で、天理市で2番目に大きい古墳です。宮内庁が崇神天皇陵(すじんてんのうりやう)としており、県内でも有数の規模を誇る前期古墳です。内容はあまりわかっていませんが、写真のレプリカのような銅板が出土したようです。



行燈山古墳出土 銅板のレプリカ

櫛山古墳(くしやまこふん) 柳本町 古墳時代前期

長さ約155mの双方中円墳(そうほうちゅうえんふん)という変わった形をしている古墳です。中円部では中央に竪穴式石室が確認され、盗掘を受けていたものの、文様を施したり変わった形をした腕輪形石製品(うでわがたせきせいひん)、滑石製(かっせきせい)の合子(ごうす)や盤(ばん:容器)などが出土しました。石室内には、形が不明ですが、石棺(せっかん)がおさめられていたようです。また、石室のまわりには鱧付円筒埴輪が円形に立て並べられ、配置は不明ですが、形象埴輪もあったようです。その中の盾形埴輪片は立花遺跡のものと同様に似ています。なお、これらの形象埴輪は、奈良県内では古い一群に属しますが、種類が豊富な点で注目されます。

後方部では白い礫(れき:小石)が一面に広がる特殊な施設を確認しました。そこからは多量の腕輪形石製品が出土しましたが、それら以外にも腕輪形土製品や笠部のあるきのこのような形の異形石製品、小型の土師器なども出土しました。一方、北側の濠(ほり)では堤状の遺構を確認し、そのまわりから現状で最古級の「柵形埴輪」が多量に出土しました。



櫛山古墳出土 腕輪形石製品ほか



櫛山古墳出土 柵形埴輪

渋谷向山古墳(しぶたにむかひやまこふん) 渋谷町 古墳時代前期

長さ約300mの前方後円墳で、天理市で一番大きい古墳です。宮内庁が景行天皇陵(けいこうてんのうりやう)としており、県内でも有数の規模を誇る前期古墳です。内容はあまりわかっていませんが、写真のレプリカのような石枕(いしまくら)が出土したようです。



伝渋谷出土 石枕のレプリカ